

守護神 ゴーレス

第12話
囚われの令嬢
HOUSE OF RISING SUN

作：みかつきなお

絵：せんざいナオミ

守護神ゴーレス第12話

囚われの令嬢

House of Rising Sun

伊座の浜の地形

伊座の浜、これは地図上の名称である伊座浜群島

および沖つ伊座神礁、南奥武島を含む本島北西海上に浮かぶ島々を総称する伝統的な呼び方である。

本島北西部の伊平屋島伊是名島の西5kmに浮かぶ南奥武島より60kmに渡って点在する島と岩礁およびサンゴ礁、さまざまなかたちが混在する島々だ。

もつとも特徴的なのが海底火山の山頂部が海面に露出した岩礁地帯『淡島』を中心とした二重のカルデラが潮流の変化を激しくさせ、海の難所とよばれていよい。その中でもカルデラの中の中心にある『神門』は聖地とされている。

きた。いくつかの琉球開闢神話がある中で、久高島を中心とした神々の上陸神話と対をなす神話が伝えられている。

ニライカナイよりアマミキヨとシネリキヨが最初に作った島が淡島のカルデラの中央、神門を中心にして海をかき回してその波によって島々を作り稻を育てるために雲の神と水の神と火の神を生んだが、火の神によって稻は焼かれてしまった。神々はここを離れてまた新しく伊是名島と伊平屋島を作り沖縄本島を作ったという神話であるが、この神話を由来として沖縄では火の神を各家庭で大事に祭っているという起源説話が伝わっている。

諸説あるが、伊座の浜神話は17世紀に成立した沖縄の古事記日本書紀である『中山世鑑』には載らず、18世紀の第二尚氏王朝の祭祀の記録にしか現れないことから比較的新しい時代、本土との交流によつて日本神話と融合して出来たという説が主流となつてゐるが、それを資料主義と批判する民俗学者からは奈良時代に古事記日本書紀が編纂される時代の全国にあつた国作り神話の原型が残されていると提唱されている。両説とも平行線で議論されているが、喜界島のグスク遺跡発掘とともに古琉球と本土文化とのつながりが指摘される中、国作り神話原型説も有力視されている。

伊座の浜神話

伊座の浜は古來琉球王国の時代より聖域とされて

囚われの令嬢

王家の分家が代々行つてきた伊座の浜の神事は一族の女性が神女になることによつて行われる。19世紀前半に王家の分家となつた伊是名家は200年近くに渡つて神事をつかさどつており、首相伊是名朝英の孫娘いぜなちょうえいであつても例外ではない。

13歳の伊是名龍希は12歳になつてからは伊是名家本家の女子の勤めとして神女となり神事に參加してきた。

龍希は自分がどうやら本土の山の別荘のようなどころにいることはわかつた。雪がだいぶ積もつていることがなによりの証拠だ。那霸で国際通りの工事を見ていたら祖父の使いだといわれた人物について、小型ジエット機に乗せられたところまでは覚えている。眠気から覚めるといつの間にかここにいる。それから1日経つた。

2階建てのログハウスは見通しのわるい山の谷間にある。山の間の遠くに白い山が見える。民家は見えない。

普通にいろいろ家具と日用品のある普通の部屋。

自由にテレビを見ていい。でも監視カメラが屋敷の内外にたくさんある。冷蔵庫に野菜はあつても包丁はない。

張り紙がしてある。

「出ないでね。センサー沢山ついてるから逃げられないよ。食事はまた夕方に届けるから」

大変なことになつた！と思つてみたもののテレビでは私のことがニュースになつてもいないし、ネットを開いてみてもニュースはないし、こちらから書き込みが出来ない設定になつていて。誘拐なら報道規制でニュースにはなつてないのはわかるんだけど。

黒髪ロングの女の子が鏡を見ている。龍希は鏡の前で顔をたいたた。おじいちゃん……。どうしよう誘拐されちゃつた。



ここへ黒いコートの男2人に連れられたスカジヤンにブレザーの制服の小夜子がやつて來た。

「拉致監禁犯！ ゴーレスの秘密なんか絶対しゃべらないからね！」

「別になにもしなくていいよ。明日までここで暮らしてくればいいから」

小夜子のパンチはすべて手のひらで受け止められた。

「まあ乱暴はしないから仲良くやってよ」

そういつた男達は去つて行き、テレビを見ている龍希と目が合つた。

「こんにちは……」

あ、なんかかわいい子。小学生から中学？

整つた顔の龍希がペクリとお辞儀した姿が上品で、小夜子は気持ちが少し落ち着いた。あつたかそくなチエックのポンチョと黒の上品なベロアのワンピースがかわいい。

お人形さんみたい。お嬢様だ……。

唯一の解決方法

「あつたー（あいつら）何考えてるばー！」

「一さん、警察が全力を尽くすから」

裕一が激怒しているのは小夜子が誘拐された現場

である浦添市大平の通称『バイパス』、国道330号の道路沿いであつた。

県警の和宇慶警部補は事件の前後をゴーレスチムの面々に事情聴取していた。

舜は座り込んで落ち込んでいた。

みずきはかたわらに一緒にすわった。

「みずきはどうだったのか」

「バイクで2人で走っていたら覆面パトカーに止められた。そして私服の警官に運転していた小夜子だけ呼ばれて免許書の確認をしていつのまにか覆面パトカーにつれていかれた。とても嫌な空気があつたのにわたしかつたら警察だから安心してしまつた」

みずきはためいきをついた。

パトカーから制服警官が出てきた。

「警部補！ 浦添城址公園で垂直離着陸機が降りた件、そこで被害者の女性らしい目撃情報があがりました」

「やっぱりつれていかれたのか……」

舜がため息をついているとみずきが前に立つた。

「救いにいこう！ もう犯人はわかっているでしょ」

「わかるけどどうすればいいのか」

みずきは少し考えて小声で言つた。

「警察より頼りになるのは兼光しかいないんじやないの」

「事態が切迫している。しかたない、そうしよう」

舜は携帯を取り出した。画像付のライブフォン状態で対面でダイヤルし、総務課から秘書課に繋がった。

「兼光社長はいらっしゃいますか？」

「はい、秘書の橋です。社長は今飛行船で移動中の電波状況が悪いですが、急ぎますか」

ブロックノイズの多い画面で兼光の顔が現れた。

「やあ、今高知の上空です。大変なようですね」

「困ってる。大掛かりな誘拐です。本当に困つます。兼光さんの力を借りてなんとかできないかな」

「うん。こちらも拉致されている人物がいるのだ。

おそらく犯人は同じなのではないかな？ その件で情報を総合して中部地方に当たりをつけている。その件も含めて今向かっているところだ。イヒカと一緒にね。船越さんと安慶名さんも一緒だ。手勢は多いほうがいい。ゴーレスにも来てほしい」

「ええ？ そこで当たっているのかもわからないのに。ゴーレスごとだなんて」「今日、続々と不審な動きが本土で頻発しているんだ。橋製作所が犯人に違いない」

兼光が出した動画は中央線に自衛隊の特殊輸送車両にアクチュエーター機がバーツに分解されて搭載されている画像が写しだされた。

「橋の霞ヶ浦、木更津工場から送られているもの

だ」

「兼光さんはそれを知る立場ではないのか」

「私は利用される立場になった。沖縄が利用される立場になるのなら私は桐丸に反旗を翻してもいい。ただそれを確かめに向かっているのだ」

「わかりました。ニューロ研と相談して向かいたいと思います」

みずきは父のことが頭に浮かんだ。

へなにか返事して。困つてる

それだけのメールを打って父に送った。

なにがはじまるのだろう。戦いはやめてほしい。

山荘の二人

本土のどこかの山中としか理解できない2LDKの山荘で、窓の傍で丸まつてただ外を見つめるだけの龍希、そわそわと部屋を物色しながら思案を続ける小夜子。

「ねえ、どうしようもない気持ちなのはわかる。一緒にお話ししない？」

「はい……」

小夜子と龍希は焚き火の前で暖をとりながら若干かみ合わない会話を続けながらどうすればよいかを模索していた。そして龍希の身の上がわかつたの

だ。
「えー！ 伊是名首相の孫？ うちなーんちゅでしょ。あんまりなまつてないねー！」

「ええ、普段は標準語なんです。方言は神歌を歌う時だけです」

「神歌、ええと伊是名家は琉球王家の流れで……」

「はい、『伊座ぬ大あもしられ』琉球王国より代々続く私の神職です。王朝時代より一族の女性は神の歌を受け継いで来たんです」

さすが名家の出なんだ……。
「あつたかくならない？」

小夜子は龍希の手を握って言つた。

「え？」

「歌つて。神様にささげる歌。聞きたいから……」

「でも、儀式の場でしか歌つてはいけないと伯母から言わわれているんです」

「伝統を受け継いだつてすごいことじやない。私のにーにーはね、ええと守護神さまと対話できるんだ。王様の魂と」

「小夜子さんも祝女の家系……？」

「多分そんな感じ。多分御先祖は一緒にその神歌を歌つたかもしれないよ」

「神歌は神様に思いをつたえる方法なんです」「じゃあ私達の願いはきまつてているじゃない」

龍希は小夜子を見つめて頷いた。

二人は窓を開けて曇った空、周りの木立と遠くの山を見つめた。

「では小夜子さん始めます。神様に私達がここにいるとみんなに伝えて欲しいと願います」

龍希は横に並んだ小夜子の手を強く握つた。

そして龍希の歌が始まつた。

……なに、これは歌なの？ ウチナーグチは『うて』いる『て』（上の太陽）以外よくわからない。ハングルにも聞こえる言葉。でも言葉じやない。声

が楽器のようだ。

これはモンゴルのホーミー？ 稲田さんから聞いたことある。いくつもの音の重なりを同時に歌う。

人の声じやない。天から降り注ぐような声！

龍希の歌にしばし聞き入つて、歌がおわつても目を開けられなかつた。

先ほどまでどんよりと曇つていた空がわずかの間に青空になつていた。

これは龍希ちゃんの能力？

「この土地の神様たちが声を聞いてくれた。雲をとりのぞいてくれた。そして、『暖かくてあげよう』つていつてくれた。嬉しい。本当に神様の声が聞こえた！」

龍希は嬉しさと寂しさの混じつた涙を流しながら小夜子の胸に抱きついた。

小夜子ももらい泣きしながら龍希の頭をなでた。
「大丈夫、にーにーたちと龍希ちゃんのお爺さんは
助けにきてくれる」
「うん！」

龍希は神女の顔から少女の顔に戻った。

つづく